
空っぽのピン

ひみらぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空っぽのビン

【著者名】

N4348X

【作者名】

ひぬりわ

【あらすじ】

何にも入っていないガラスの小瓶。その中に吸い込まれた少年ユウ君。ビンの中には知らない世界が広がっていました。

01・窓のビン

窓の、小さなビンがあつました。

透明なガラスで出来ていましたから、中に何も入っていないこと一眼でわかります。

でも、コウくんは中に何かがある気がしてなりません。いろいろなところからビンを観察します。横から底から上から、まじまじと見ます。

けれどもやつぱり何もありません。振ってみても逆さまにしてみても、何も出てきません。中を覗いて見ても、やつぱり窓っぽです。

それでもコウくんは信じませんでした。何もないけど、何かある。それはきっとよく見ないとわからないものだと思ったコウくんは、ビンの中をじっと覗き見ました。中に入れたら、きっとよく見えるのに、と考えながら。

そう考えた次の瞬間でした。なんと、コウくんは考えたようにビンの中へ入ってしまったのです。ビンの口に吸い込まれたと思つたが、中にダイブしていました。

どうしてできたのか、どうしてそうなったのか、さっぱりわかりません。でも、ビンの中に入ってしまったのは確かです。

02・ビンの中

ビンの中に入り、コウくんは底に着地しました。そして中を見渡しますが、中にはやつぱり何もありませんでした。ジャムもハチミツもパスタもありません。ゴリラありません。

ガラス越しにはビンの外が見えます。くにゅりと曲がった世界です。コウくんはそれがおもしろおかしくてしばらく見ていましたが、やがて飽きてしまつて、ビンの底にぺたりと座り込んでしまいました。

やうして上を見上げると、コウくんは大変なことに気が付きました。

ビンの口が つまりコウくんが通ってきたところですが それはそれは高い場所にあつたのです。背伸びしても、ジャンプしても、どうやっても、どうもません。

これでは外に出ることができません。コウくんはどうしたらいいかわからず、途方にくれて呆然とその入り口を見上げました。

するとどうでしょ、ビンの口がもつと高くへと底から離れていくではありませんか。ビンの口はずつと高くに行つてしまい、星のよみ小さくなつてしましました。

そこから青色が広がり、天を覆つて空ができました。同時にコウ君の足元から地面が広がり、床を覆い、そして草や木が生えてきました。

じめ、もうしないひびき、からっぽだつたビンの中を高く高く
と広い地上ができました。

びひしてじょりうか、コウ君には、何故いつなったのか理由がわ
かりませんでした。でも、ビンの中は何だか楽しそうです。ビンか
ら出す方法もわからないので、コウ君は少し散歩してみよとい、歩
き始めました。

03・当たり前の「こと

しばらく歩いて行くと、小さな畠が見えてきました。中では、人の農夫が鍬を振るっています。

なんだかとてもいい匂いのする畠です。一体何を育てているのでしょうか。畠の茶色い土からは、沢山の小さな黄緑の芽がびよこんと頭を出して整列しています。でも、コウ君にはこれが何の植物かという疑問よりも、もっと気になることがありますから、そのことを農夫に聞いて見ました。

農夫は、まだ芽の出てない土を耕していました。コウ君は声をかけます。

「ねえ、どうしてここはビンの中なのに、空と土があつたり、植物が生えてたり、あなたみたいに人がいるの？」

「ウ君の質問に、農夫は首を傾げました。でもすぐに、

「君はどうしてここにいるの？」

「ビンの外から、中に入つて来たからだよ」

「ビンの外は、どんな風になつてているんだい？」

「お日様とお月様が順番に空にやつてきて、忙しい人とのんびりしている人と動物いて、植物があつて、空気がおいしかつたりますかつたりするよ」

「じゃあ、どうしてお日様とお月様が順番に空にあるんだい？ どうして忙しい人とのんびりしている人がいるんだい？ 空気はどうしてどこにでもあって、おいしかつたりますかつたりするのか、わかるかい？」

「ウ君は首を傾げて考えましたが、こう答えました。

「わかんない」

「そうだろう。君の質問も、やつこいつことなのぞ」

農夫はそう言つと、再び畠を耕し始めました。

「当たり前のこと程、理由がわからないし、皆考えようとしてしないのぞ。だって当たり前なんだから」

04・森の中へ

それからコウ君は、のどかな草原を気が向くままに歩いていました。

道はありません。足下は全て緑の草に覆われています。コウ君はその草を踏みしめて、自分の足跡を残しながら、またそれを楽しみながら進みました。

やがて景色の端に、ブロッコリーのようなものが映りこんできました。

森です。青々とした大きな葉を沢山つけた木々です。

そしてその森の手前で、一人の少年が長い枝で、地面に絵を描いていました。

「ウ君は、その自分よりも幼い少年に声をかけました。

「何をしているの?」

「お絵描きしているの。キミは、森の中へいくの?」

「ウ君は森へ進もうか、迷いました。

すると少年が言いました。

「森の中はね、きっと、楽しいよ。面白いもの、新しいものが、いっぱいあるはずだから」

「キミは森の中に入つたことがあるの?」

「ないよ。でも、森の中に入つてみたいとは思つてる。けどね、怖いから入れないの。だって森の中には見たことがないものがあるんだから。僕は森の中に入りたいと思つてるけどね、その勇気がなくて、だからここでお絵描きしてるの……」

ユウ君は森の中を見つめました。森の中は楽しそうです。きっと何かがあるに違いありません。でも、木々に生い茂る大きな葉のせいで、中は暗いです。

それでもユウ君は森の中へ進んでいきました。森の中は暗くて怖いけれど、それと同じくらいに楽しい事があると思ったからです。

05・歌う鳥達

森の中は薄暗く、けれども入つてしまえば怖いこと何てあります。葉が揺れて、それに伴つて地面に落ちる日光も揺れます。でも、動物の姿は全くありません。鳴き声がするのは確かなのですが、他に物音はしません。聞こえるのは鳴き声と風の音、葉っぱのこすれあう音、自分が草を踏む音だけです。

しかし、よく耳を澄ますと歌が聞こえます。変な歌を、数人が歌つているようです。

かさかさ葉っぱ 見え隠れ
恥ずかしがり屋も風には負ける
かさかさ葉っぱ シャイ葉っぱ
冷たい風に押し吹かれ
葉っぱ かちかち まつかつか

その声は真上から聞こえました。だからゴウ君が上を見上げると、そこには数匹の茶色い小鳥がいました。どうやら歌つていたのはこの小鳥達のようです。

「キリ達は喋れるんだね」

ゴウ君は驚きました。鳥が人と同じ言葉を話しているのが信じら

れなかつたのです。

すると小鳥の一匹が答えました。

「私達はいつもこいつして歌つていたわ。他の鳥達だつて、こいつ風に歌つているじゃないの。そうでしょう？ 珍しいことじゃないでしょ？」

「僕の知つてこむ鳥は、キミみたいに話さないよ？ ぴっぴつて、鳴くよ」

「あらー、あらあらー、とこいつとは、キミ、こままで揃しているわよー！」

小鳥達は笑い出しました。

「鳥の声がそつ聞こえたつことは、今までキミは私達が何を話しているのか聞こうとしなかつたからよ！ 言葉を持つているのは人間だけじゃないんだから。動物だつてお話するわ。可愛そつに、今まで鳥の歌なんて聞いたことがなかつたのね、面白い話が沢山あるのに」

「でも、鳥とおしゃべりしたつて人、僕知らないよ。鳥はぴっぴつて鳴くつて、みんな言うよ？」

「じゃあ、キミの住んでるところではそれが常識なのね……それじやあ仕方がないわね。常識は世界のルールだもの」

と、小鳥達は笑うのをやめて、哀れむようにコウ君を見下ろしました。しかしそくに笑つて、

「『』ではあつとあらゆるもののがおしゃべりするわ。それが『』の『当たり前』だから

「そつなんだ。じゃあ、キミ達の乗つている木もおしゃべりするの

?」

「するわよ。でも、もともと木は無口だし、キリサシハシベツヒヤク
れていないみたいだから、あつとお話をできないわね」

それを聞いてコウ君はがっかりしました。でも、他の動物となら
お話できるかもと思い、小鳥達と別れて森の中を進みました。

木の根元に、大きな花が一つ咲いていました。ラッパのように綺麗に咲いた花です。色は鮮やかな赤色で、暗い森の中では浮いていましたが、とてもいいにおいがします。食べたらきっと、ハチミツみたいに甘いのかな、とコウ君は思いました。

近寄つてコウ君は花の中を覗きます。花の中はずっと奥まで続いているかのように深いです。ずっと奥は、真っ暗です。覗き込んですぐに飛び込んでみたいと思つたコウくんでしたが、その奥の暗闇を見て怖くなり、花から離れました。

と、一匹のミツバチが森の奥から飛んできました。この花の甘い香りに誘われたのでしょうそのミツバチは、匂いのものを確認するかのように大きな花の周りを飛び、そしてミツバチは花の中へ、ミツを取りに入つていきました。

その瞬間、ラッパのようになっていた花がぱくりと閉じてしましました。花の中で、焦ったミツバチがぶんぶんと暴れる音が聞こえます。でも、すぐに聞こえなくなつてしましました。

食虫植物だ、とコウ君は気付きました。虫を食べてしまつ花です。

「ああ、恐ろしいー！」

コウ君の背後で、そんな悲鳴が聞こえました。振り返ると、草むらに生えていた小さなたんぽぽが震えていました。

「虫を食べる花だなんて、なんて恐ろしいんでしょー！」

「キミは、食虫植物を知らないの？」

「食虫植物ですか？」

たんぽぽはさらに震えました。

「そんなもの、知らないわ！ ありえないもの！」

07・花を食べる花

「キリは花なの?、同じ花のことを探りませんだね」

「ウ君は小さなたんぽぼに言いました。するとたんぽぼは叫びました。

「あんなの、私と同じ花なんかじゃないわ! 第一、同じ花だったとしても、同じ花だからといって他の花のことがわかるわけないじゃない」

「でも、花の仲間同士でしょ?」

「じゃああなたは同じ人間同士なら、誰でも分かるわけ?」

「それは……わかんないや」

と、コウ君とたんぽぼが話していると森の奥からかさかさと、草をわけてこむらにやってくる、なにかの足音が聞こえてきました。するとたんぽぼは頭を草の中に隠してしまいました。

「どうしたの?」

突然のことに驚いたコウ君は屈んでたんぽぼに声をかけますが、たんぽぼは死んでしまったかのようにびくとも動きません。

「大丈夫? おなか痛いの?」

「ウ君は心配してたんぽぼに何度も声をかけます。でもたんぽぼは全く反応しません。

やうしてこむらに、森の奥から草を搔き分けてやってきたそれ

が姿を現しました。それは一つの大きな紫色の花。でも、ただの花ではありませんでした。その花の根っこは人の足のように動き、花びらには小さな牙が付いていました。紫の花は周囲を見回し、そばで震えていたる小さな花をみつけると、それを頭から覆いかぶさるよつとして自分の花びらで包みました。

花が、花を、ぱくりと食べてしまつたのです。

紫の花は、それで満足したのか、また、森の奥へと帰つていきました。

隠れていたたんぽぼがもとのよつにすくつと立ります。

「ああ、びくつくつした」

たんぽぼはびくつと震えました。ゴウ君はもつと震えていました。

「あの花、別の花を食べたよー。あんなの、花じゃない！」

するとたんぽぼは冷静に答えます。

「でも、あれも花よ。あなた、花を食べる花を知らないのね」「そんなの知らないよー。第一、共食いだよー。恐ろしいよー。」

たんぽぼは首を傾げました。

「あら？ 人間だつて、共食にするじゃないの？」

「そんな恐ろしいことしないよー。」

ゴウ君は、思わず怒鳴つてしましました。

進んでいくうちに、森の中はますます暗くなつていきました。肌寒くもなつてきました。それでもユウ君は先に進みます。でも、歩くスピードは先よりも遅くなっています。ユウ君は疲れているのです。

どこかで休もうと思いました。でも、焚き火ができるような場所も、火をつけるマッチも持つていません。

そんなところで、ユウ君は森の開けた場所に出ました。火はないけれど、ここで休める、とユウ君は安心しました。

でも、その開けた場所の中央に、長くて細い何かが刺さつています。暗くてそれがなんなのか、わかりません。恐る恐る近づいてみると、それは、古びたライフルでした。長い薙が這つている様子から、ずうっと昔からここに刺さつているのでしょうか。

それよりも、ユウ君はライフルの根元にあるものに喜びました。そこにはマッチがあつたのです。

ユウ君はすぐにそのマッチを拾いました。そして近くから適当に枝や葉っぱを集めてきて、それに火をつけました。焚き火ができると、だんだんと身体が温かくなつてきます。

「……ねえ」

焚き火に当たつていると、不意に声がしました。

ライフルでした。

「君、旅をしているの？」

「違うよ。散歩しているだけ」

「ウ君がそう答えると、ライフルは黙ってしまいました。でも、しばりくして、

「君、街へ行くの？」

ライフルはそう、ユウ君に聞いてきました。でも、ユウ君の散歩の予定は未定です。

「わかんない」

「そう……」

するとライフルはがっかりした様子で返事をしました。今度はユウ君がライフルに聞きます。

「キミは、街に行きたいの」

「うん」

「どうして？」

「生まれ変わりたいんだ」

さすがのユウ君も、首を傾げました。

09・優しいライフル

「僕、人を殺すために生まれてきたの」

ライフルは唐突に言いました。

「この森が戦場になつたときも、僕は沢山人を撃つたよ。でも僕が殺したくて人を沢山殺したわけじゃない。僕を使つていた人が、他の人を殺したくて、それで僕を使つて人を殺していたの。でも僕、人を殺すのは嫌だつたんだ。そう僕を使つている人にいつたら、『ライフルのくせに生意氣だ』って言われちゃつた。『ライフルは殺す道具として存在しているんだ』って、言われちゃつたの……」「キミは、人を殺すの？」

「そう。そのための道具なの。でもそれは僕のせいじゃない。僕は僕が嫌だ。だから僕、生まれ変わりたいの。こんな人を殺す道具なんかじゃなくて、もつといい道具、人と人とをつなぐ道具に……そういう、お手紙を留めておくような文鎮がいい」

ユウ君はこくこくと頷きました。でも、幼いユウ君には、このライフルが何を言つているのか、半分ほどしか分かりませんでした。ただ、さなぎが蝶々になるみたいに、このライフルも変身するのだということはわかりました。そのためにライフルは街に行きたいといふことも分かりました。

ユウ君は、地面に刺さつたライフルを引き抜きました。

「じゃあ、街につれてつてあげるよ」

そしてユウ君はライフルを背負いました。ライフルは嬉しそう

「

「本物?」

「うん。だってキミ、ここで僕がいるんじゃないと、変身できなんでしょう?」

わくして、コウ君はライフルと一緒に散歩するようになりました。

朝になりました。

「ウ君はライフルを背負って、再び森の中を進み始めました。森の中は、昨日となんら変わりがありません。

しかしそんな森の中で、一軒の小さな家が建っているのをユウ君は発見しました。赤い屋根に白い壁の、可愛い家です。小さな庭もあり、また可愛い花が咲いています。

ユウ君はその家のドアの前に来ると、ドアをノックしました。

「ンンンンン。

三回ノックしました。それからじぎじぎく待ちます。しかし、家中から誰かが出てくる気配はありません。

「ンンンンン。

再び三回ノックしました。それから、

「誰かいりますか？」

と、声をあげましたが、やつぱり家中から誰かが出てくる気配はありません。

そこでユウ君は、ドアノブに手をかけました。鍵はかかっていました。ドアはあっさりと開き、ユウ君は恐る恐る中に入りました。

した。

「入りますよ」

するとそこでは、一匹のピンクの豚がドレッサーの前に座つて化粧をしていました。

「「めんなさいね、いま、お化粧するのに忙しいの」

豚は鏡を見たままです。ユウ君を見ようとしません。自分の顔におしおいをべたべたと塗りつけ、真っ赤な口紅もぐりぐりと塗り、また頬紅もべちゃべちゃに塗つたくっています。

「あら、素敵だわ！」

豚は鏡の中の自分を見て満足していますが、ユウ君は気分が悪くなつてすぐに家を出ました。化粧した豚の顔は、恐ろしく不気味だつたからです。

「あれが素敵なんだって」

ユウ君は背中のライフルに語りかけます。

「あれ、怖いね」

「そうだね。あの豚は自分がことが素敵だつて思つて、実際はどうなのかわかつていないんだよ」

ライフルもさつと言いました。

11・森を泳ぐ魚

森の奥をゆっくりと動く、黒い影が木々の向こうで見えた。

ユウ君はその影を見たとたん、びっくりして「さあやあ！」と声を上げて尻餅をついてしまいました。するとその影は動きを止めて、ユウ君の方へ向かってくるではありませんか。

怯えたユウ君は背中のライフルを取り、銃口をこちらへ来る影に向きました。

「引き金を引かないでね。弾は一発入っているけど、僕、使われるの、いやだよ？」

ライフルがそう言います。だからユウ君はライフルの引き金に手をつけず、銃身を両手で握って持ちました。

黒くて大きな影は徐々に近づいてきます。そしてそれは、木々の間から姿を現しました。

それは大きな魚でした。

大きな黒い目は森の奥を見つめていて、鱗は日光に照らされて七色に輝いています。ひれはふわふわと揺れています。大きな魚は、まるで水の中を泳ぐように宙を気持ちよさそうに泳いでいました。

尻餅をついていたユウ君は、そのガラスでできたような魚をあつけに取られて見つめしていました。

魚の黒目が、ぎょろりとユウ君を捕えます。その瞬間、揺れた魚の瞳には虹色の光が輝きました。

魚がユウ君を見つめたのは、ほんの数秒のことでした。魚は元のよつに森の奥を見つめると、そちらへと泳いでいきました。

やがて、コウ君は森を抜けました。森の向こうに待っていたのは、いくつものガラクタの山が続く道でした。

でもその道に進む前に、森のすぐそばにあった小さなお店で休むことにしました。

中に入ると、そこはとてもかわいらしくお店でした。コーヒーのいににおいが漂っています。テーブルは三つだけあり、一つのテーブルにはすでにウサギが座っていて、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいました。

「やあ、いらっしゃい」

店主のおじさんはじめよく迎えてくれました。けれど、コウ君はお金を持っていません。

「こんなに。あの、お水を一杯もりませんか？　お金持つてないんです」

すると店主のおじさんはライフルを見ながらいました。

「お水なんかでいいのかい？　ジュースや紅茶もあるよ。」「でも、お金持つてないんです」「お金なんていらなによ。好きな物を、好きなだけつべ」

やつして幸運なことにコウ君は無料で食事することができました。

「おひして店員のおじさんが「お金はこらなこ」と聞いたのが、口
う嚙には分かりませんでした

13・紅茶の中のカエル

「ウ君は店主のおじさん、紅茶をお願いしました。

店主はすぐに紅茶を持ってきました。深くいい匂いのする、綺麗な色をした紅茶でした。夕日のような色をしています。しかしウ君は、その運ばれてきた紅茶に手をつけませんでした。熱いものが苦手なのです。

しばらくしてから、ウ君は白い陶器のショガーポットから砂糖をスプーン一杯分をすくつて紅茶の中へ入れました。そして紅茶を混ぜようとしたが、その手が止まってしまいました。

紅茶の紅い水面には、小さなカエルが映っていました。カエルはこちらを見上げ、頬を膨らました。

「ウ君はびっくりです。

「どうしてキミはそんなところにいるの?」

紅茶の中にはいるといつよりも、熱い中にカエルがいることに驚きました。ウ君の知っているカエルは、涼しい水辺にいるものですから。

「やのうと思えばできるんだよ

カエルは言いました。

「これは思い込みなんかじゃない。やれば本当にできる」とだつて

あるのや」

そしてカエルはカップの奥のほうへと泳いでいきました。

慌てたユウ君は思わず立ち上がりつてカップの中を覗き込みました。

でも、もうカエルの姿は映っていませんでした。

14・ガラクタの山

紅茶を飲み終え、ユウ君は小さなお店を出ました。そして、ガラクタの山がいくつもある道へと進みます。

ガラクタの山は、まるで森の木々のようにいくつもあります。大きさも様々。数個のガラクタが積み重なった山や、数えきれないほどのガラクタが積み重なった巨大な山と、沢山あります。

ガラクタにも様々なものがあります。クマの人形やティーカップ、テレビや車、果てには、背負ったライフルに似たものまであります。しかしどれも汚く汚れていて、鮮やかではありません。空を見上げれば、空も鮮やかではありませんでした。鉛色をしています。

ユウ君はなんだか悲しくなりました。

しかし、少し大きなガラクタの山に綺麗な小箱が埋まっていることに気が付くと、目を輝かせました。その小箱だけ、鮮やかだったのです。

宝箱かもしれない、と、ユウ君はそのガラクタの山に駆け寄つて、綺麗な小箱を引き抜きました。するとガラクタの山はいくらかくずれましたが、ユウ君は気に留めません。小箱を地面に置くと、ふたを開けました。

するとどうでしょう。小箱の中から、ピヒロの首が高笑いしながら飛び出してきました。

ユウ君はびっくりです。声を上げて小箱 びっくり箱から離れ

ます。背中ではライフルが笑っています。

「こんな悲しい場所でも、面白いものはあるんだね」

「ウ君は飛び出したピエロの首を中に押し入れふたをすると、小箱をもとあつたガラクタの山の中に押し込みました。

「ここに来た人が、この箱を見つけて開けたら、きっとびっくりして笑っちゃうんだろうね」

「ウ君は笑いました。

15・捨てられた人形

ガラクタの中には、ぼろぼろになつた人形の姿もありました。どれも薄汚れていて、手足が千切れたりして中の詰め綿が出てしまっています。

ユウ君はこの人形達がかわいそุดな、と思いました。でも人形達は何も喋らうとしません。

死んでいる訳ではなさそうです。その証拠に、ボタンやビーズの目は輝いています。彼らはまだ、生きているのです。

しかしおしゃべりしている人形も、泣いている人形もいません。

そこでユウ君は、近くにあつたウサギの人形を手に取りました。方耳の根元がちぎれ、そこから綿が飛び出した、汚れたウサギの人形です。ユウ君はそのウサギの人形を軽く叩いて埃を払うと聞いてみました。

「キミは、どうしてここにいるの?」

するとウサギの人形は顔を上げました。ちぎれた方耳が揺れます。

「捨てられたんだよ」

ウサギは淡々と答えました。だからユウ君はまた聞きます。

「こんなところに捨てられて、悲しくないの?寂しくないの?」

ウサギの人形は答えました。

「悲しくないし、寂しくないよ。僕たち人形はもともとそういう物であるし、僕たちは沢山遊んでもらって愛されたから。こんなところに捨てられてもね、遊んでもらって愛された日々を思い出せば、悲しくないし、寂しくないんだよ」

ユウ君はウサギの人形を元の場所に座らせました。思い出に浸る邪魔をしてはいけないと思ったからです。

そうして先を行こうとしたユウ君に、ウサギは言いました。

「もし僕らの事をかわいそうだと思うのなら、その気持ちはこの先を行つたところにいる人たちにあげて。彼らのほうが、ずっととかわいそだから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4348x/>

空っぽのBIN

2011年11月13日03時49分発行